

鉄心斎文庫所蔵

伊勢物語

図録

【第十五集】伊勢物語

注釈書の世界 Ⅲ



鉄心齋文庫所蔵

伊勢物語図録



第十五集



III

鉄心齋文庫 伊勢物語文華館



目次

ごあいさつ……………芦澤美佐子……………4

伊勢物語注釈書の世界Ⅲ……………山本登朗……………6

一	肖聞(伊勢物語肖聞抄・文明十二年本)	8
二	伊勢物語聞書(肖聞抄異本)	10
三	勢語聞書	12
四	伊勢物語聞書	14
五	伊勢物語抄(伊勢物語惟清抄・異本)	16
六	伊勢物語秘伝抄(伊勢物語嬰兒抄)	18
七	伊勢物語抄(北野隨水自筆)	20
八	伊勢物語私聞	22
九	勢語古義	24
十	伊勢物語抄(伊勢物語講本)	26
十一	伊勢物語抄(道見親王編・伊勢物語抄)	28
十二	伊物吾言抄	30
十三	伊勢物語秘注	32
十四	伊勢物語秘訣(伊勢物語奥旨秘訣)	34
十五	伊勢物語奥旨・貞徳翁口伝(伊勢物語奥旨秘訣)	36
十六	伊勢物語解・盤斎前説(闕疑抄初冠・冒頭部)	38
十七	伊勢物語諺注	40

三十	伊勢物語新釈(藤井高尚自筆稿本)	66	十九	勢語風從紀(勢語臆斷)	44
三十一	伊勢物語新釈	68	二十	勢語臆斷	46
三十二	伊勢物語新釈弁	70	二十一	勢語臆斷	48
三十三	伊勢物語句解	72	二十二	伊勢物語契沖說	50
三十四	伊勢物語注・百人一首注(秋田保微自筆)	74	二十三	伊勢物語童子問	52
三十五	伊勢物語箋	76	二十四	妹背物語古意(伊勢物語古意)	54
三十六	伊勢物語添注(清水浜臣自筆稿本)	78	二十五	伊勢物語古意	56
三十七	伊勢物語図絵	80	二十六	伊勢物語古意・加新釈	58
三十八	伊勢物語中・考説	82	二十七	伊勢物語傍注(賀茂季鷹自筆加注本)	60
三十九	伊勢物語略標	84	二十八	伊勢私記・河津祐章記	62
四十	狩野派鍛冶橋狩野	86	二十九	勢語図抄(勢語図説抄・斎藤彦麻呂自筆)	64



● 今年は、何もかもが異常気象のまゝ十一月をむかえました。

● 今回は、昨年、一昨年の秋につづいて展示は、注釈書の写本にいたしました。古注（鎌倉時代）旧注（室町時代）新注と分け江戸時代の国学者による注釈書を展示いたしました注釈書写本の一区切りといたします。

● 前回とりのこしたのもあり、それも展示いたしましたでしたが、やはり契沖の臆断、本居宣長の古意、加茂秀鷹の傍注、藤井高尚の新釈などが中心になっております。

● 古い時代から読みつがれ、さまざまな解釈がなされながら、時代と共に少しずつ変わってきているようです。読む側の考え方や、受けとめる態度かと思いますが、身近なものに見えたり、遠い所のものに思えたりしております。どうぞお誘い合わせ、伊勢物語をじっくりごらんになって下さい。





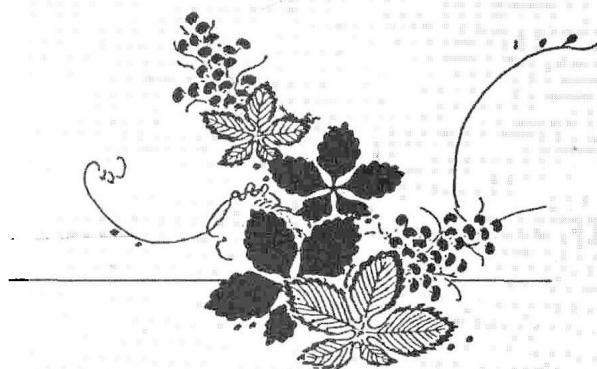
伊勢物語注釈書の世界Ⅲ

山本登朗

●江戸時代の国学者たちの新しい伊勢物語研究の幕を開いたのは、大阪の学僧契沖の『勢語臆断』だが、その内容を検討してみると、中世以来の旧注を踏襲している部分が意外に多いことに気づく。契沖はおそらく、当時広く読まれていた『閼疑抄』をはじめとするいくつかの旧注の諸注釈を読みくらべながら、それらの注記を検討する中で自分の注釈を作っていたものと思われる。自分が特に問題を感じなかった部分では、契沖はしばしば旧注の説をそのまま残しているのである。

●そんな『勢語臆断』と違つて、荷田春満の『伊勢物語童子問』は、『閼疑抄』を批判の対象に選び、旧注の伊勢物語理解を根本から否定する。旧注と春満の間には、文学作品というもののとらえ方に大きな開きがあり、それが『童子問』の激しい論調を生み出しているが、その中でももともと根本的な問題は、物語の「虚構」をどう考えるかというところにあった。伊勢物語は虚構と事実を織りまぜながら作られている。朱子学の影響を受けた春満の考えでは、人が重んずべきものはあくまでも「実」であり、「虚」は「虚偽」に等しい無価値なものでなければならなかった。一方の旧注の伊勢物語理解は、物語の虚構の中に意味(実)を見出だそうとするところに特徴があった。春満はその伝統的な見方を激しく批判し、伊勢物語の内容が本質的には事実でなく単なる虚構にすぎないことを強調して、その「実」としての価値を否定したのである。

●荷田春満に師事した賀茂真淵の『伊勢物語古意』は、当然のことながら『童子問』と同じく伊勢物語の虚構性を強調し、冒頭の総論部では旧注の理解にも批判を加えている。しかし、個々の注記を見ると、虚構に対する『古意』の姿勢は『童子問』とは大きく異なっている。真淵は、伊勢物



語の虚構の中に、むしろ事実を越えた魅力があると考えているように見うけられるのである。三段末尾の「二条の後のまだみかどにもつかうまつり給はでただ人にておはしましける時のことなり」のような種明かしの部分を、真淵は、後人の注(卷子本の裏書)がまぎれこんだもので本来は存在しなかったはずだと主張したが、それについて彼は、これらの部分は「この文」すなわち伊勢物語の「旨に大いに」背いていると言う。真淵は、事実と異なつた虚構にこそ伊勢物語の作者の趣向があると考え、実際の読解ではそれを積極的に評価していたように思われるのである。

●真淵の孫弟子にあたる藤井高尚の『伊勢物語新釈』には、伊勢物語の「実」としての価値をわざわざ否定するような記述はもはや見られない。そこでは伊勢物語の虚構はそのままの形で味読され尊重されているが、実はそれと同時に、三段末尾の「二条の後の」のような、背後の事実を思わせる種明かし部分ははじめから削除されていて、もはや本文中に存在してもいないのである。国学者たちの伊勢物語研究は、もとより実証を重んじるところに特徴を持つが、それと同時に、その学の歴史の背後には、虚構と事実にまつわるこのような複雑な展開があつた。江戸時代の学者たちは、伊勢物語を通して、文学とは何か、虚構とは何かという根本的な問題を真剣に問い続けていたのである。日本の古典文学を代表する伊勢物語は、現代の我々に、いま、いったいどんな問題を投げかけているのだろうか。

(光華女子大学教授)



（伊勢物語肖聞抄・文明十二年本）

列帖装一帖。縦二五・五糎、横一七・六糎。紺地
龍紋襷子表紙の左肩に金泥下絵の美料紙の題
箋を貼り「肖聞」と外題を記す。見返しは金地

布目。料紙は鳥の子で、墨付き九五丁、遊紙五
丁。『肖聞抄』は、宗祇の講釈を牡丹花肖柏が
筆録した聞書（↓第十一集十三〜十八）。卷
末に、自説であるむねを認めた宗祇の、年時を
伴わない識語のみを有する。

伊勢物語抄書



一「物語」と伊勢といふ事良し。八田の女は物語と
いふ事取伊勢二字とたゞことごとくおむ。
いふ事といふ事おはきく後にも義をたひ
當流は不用之

一伊勢物語といふは業平将使用伊勢にさるし
時次宮の連もあ。事い物語の所心たて
いふ事といふ事おはきく後にも義をたひ
いふ事を端はふ家本あり定家心被破之物云物
流の作者事ぬく説不同や或は業平自記と



暗の事、此の通り

右は一冊看す薄尺之時有栢禪翁聞
書せ加一見かゝる不及之歎也待看や
大概皇子御者秘藏に物語を心住けり
事ハえあるのみききりてそ其意ハ
心ありてしつゝ詞ハたしは家のとハ
あふ



列帖装一帖。縦二九・四糧、横二七・三糧。白紙。表紙の左肩に「伊勢物語聞書」と外題を直書。見返しは白紙。裏表紙は欠脱している。料紙は

厚手の楮紙で、墨付き六四丁、遊紙一丁。注の内容容は肖聞抄に近いが、異文も多い。「証本」に「師説之趣」を加えたという天文十三年(一五四四)の無記名奥書を巻末に有する。第二丁オモテに「明星坊かたみ云々」との書き入れがある。

伊勢物語之因書

一は物語と伊勢といふは古語に男女の物語といふ
より少く伊勢の二字と作て思ふにむにあり
いふはこれにほめて神の美とていふ家より言ふ
一伊勢物語といふは業平将の使に伊せに下り討計
言ふありとては物語の行ふとも仍て若
かりといふ美ありと信するより伊勢将の使と
編より本なり定家卿等へ後破と懸け此語他
の古人の記不同也或は業平自書と号するは伊
勢といふよりなりといふ依て定家卿も難達也
異書に有るはあれと此は是後者何様伊勢号
と傳へ黄門公は伊勢といふと物語のむきに



伊勢物語圖書

伊勢物語を伊勢といふ家事古は儀た男女の
 物語といふといふよりまゐりいふ二家
 男女といふといふ家よりいふといふ
 又兼平將れ候て伊勢より向て安
 又ありて伊勢より伊勢に肝心とあり
 といふといふ家ありといふ法句に儀を用
 といふといふ一部を二部よりして伊勢
 物語と書て名字に道理はあらざる

三……勢語聞書

列帖装一帖。もと二帖のうち上帖のみの零本。
 縦二三・二纏、横一七・二纏。鳥の子白紙表紙の
 中央に「勢語聞書 上」と外題を直書。見返し
 本文と同じ白紙。料紙は鳥の子で、墨付き七
 五丁、遊紙はない。注の内容は宗祇の系統を思
 わせるが、詳細は不明で、さらに今後の検討が必
 要である。



うゝぬり 元服の事と云家よりたゞり
武家よりたゞりゝゝと云始て元服するは
うゝゝと云と云書也義和七年華年元服事
十六歳と云と云云云と云信司之定家云云
年月日 元服は近衛盛と云は出の云云
号と云と云は云云常年代たる事
は云云云云と云元服の時代と云云

ついでには春日条の親役の事尚ほ文より
なれば御まじひに統へて一信目とすべし
うみきふりを物書幸元帳をして行かう
儀は初末終番れりとも書より華平一刻此儀を
うつるものや是則一部の間心いりて當時
為さるゝて華長よなりけしの領念あり也
華平、山城春長の所縁ありし南朝を志しある事
事は久しく別々言えたりといふも我々は
記しつたところからいふべきものなるや

[illegible]

とて菊よ衣衣人となりあり
一より入る女 常服なりけり其に云の
家礼の人なれかしら
こゝろ 後進で 常服にたつていふやうな
おそろひ 装束をたづねていふやうな儀也
智恵あるは 国策に入る人をいふ儀也
あそびこれ ろくろく人の遊びか國策などとは
開帳するにあたりていふこととん極まき
あそびもの 毎日をいふやうな事なりけり此の風を

四……伊勢物語聞書

袋綴一冊。縦二六・八糎、横二〇・三糎。淡紙後補表紙の中央に題箋を貼り「伊勢物語聞書」と外題を記す。料紙は楮紙で、墨付き九八丁、

遊紙二丁。末尾に元禄十四年（一七〇一）の隆（法）の奥書を有する。注の内容は宗祇系の旧注だが、詳細は不明で、さらに今後の検討が必要である。

じつたさうのわがやういふまじしれ京か
す乃里はあまうそりあうりきりそ
のさういふやまめいなる女けりかすき
けりそいふゆゑそりあうりははる里は
いふもゆゑてありけりそりあうりい
かりおとこれさめりくるかきさめりそと
きりておひりさうりあうり男あけりそ
りさめりそりきりきり

すうり乃りしりしりさのりきり
あけりそりきりきりきり
あめりしりきりきりきり

こゆきしりきりきりきりきり
男はあめりきりきりきりきり
あけりそりきりきりきりきり
あけりそりきりきりきりきり



けりて、^二書年^一のぬきとて、この書年^二下^一に、^三げん^一と
 あり、^二ぬきとて、^三かきとて、^四書年^一のぬきとて、^五か
 かりとて、^六なりとて、^七つとて、^八は、^九かきとて、^{一〇}い
 たりとて、^{一一}なりとて、^{一二}つとて、^{一三}は、^{一四}かきとて、^{一五}い
 たりとて、^{一六}なりとて、^{一七}つとて、^{一八}は、^{一九}かきとて、^{二〇}い
 たりとて、^{二一}なりとて、^{二二}つとて、^{二三}は、^{二四}かきとて、^{二五}い
 たりとて、^{二六}なりとて、^{二七}つとて、^{二八}は、^{二九}かきとて、^{三〇}い
 たりとて、^{三一}なりとて、^{三二}つとて、^{三三}は、^{三四}かきとて、^{三五}い
 たりとて、^{三六}なりとて、^{三七}つとて、^{三八}は、^{三九}かきとて、^{四〇}い
 たりとて、^{四一}なりとて、^{四二}つとて、^{四三}は、^{四四}かきとて、^{四五}い
 たりとて、^{四六}なりとて、^{四七}つとて、^{四八}は、^{四九}かきとて、^{五〇}い
 たりとて、^{五一}なりとて、^{五二}つとて、^{五三}は、^{五四}かきとて、^{五五}い
 たりとて、^{五六}なりとて、^{五七}つとて、^{五八}は、^{五九}かきとて、^{六〇}い
 たりとて、^{六一}なりとて、^{六二}つとて、^{六三}は、^{六四}かきとて、^{六五}い
 たりとて、^{六六}なりとて、^{六七}つとて、^{六八}は、^{六九}かきとて、^{七〇}い
 たりとて、^{七一}なりとて、^{七二}つとて、^{七三}は、^{七四}かきとて、^{七五}い
 たりとて、^{七六}なりとて、^{七七}つとて、^{七八}は、^{七九}かきとて、^{八〇}い
 たりとて、^{八一}なりとて、^{八二}つとて、^{八三}は、^{八四}かきとて、^{八五}い
 たりとて、^{八六}なりとて、^{八七}つとて、^{八八}は、^{八九}かきとて、^{九〇}い
 たりとて、^{九一}なりとて、^{九二}つとて、^{九三}は、^{九四}かきとて、^{九五}い
 たりとて、^{九六}なりとて、^{九七}つとて、^{九八}は、^{九九}かきとて、^{一〇〇}い
 たりとて、^{一〇一}なりとて、^{一〇二}つとて、^{一〇三}は、^{一〇四}かきとて、^{一〇五}い
 たりとて、^{一〇六}なりとて、^{一〇七}つとて、^{一〇八}は、^{一〇九}かきとて、^{一一〇}い
 たりとて、^{一一一}なりとて、^{一一二}つとて、^{一一三}は、^{一一四}かきとて、^{一一五}い
 たりとて、^{一一六}なりとて、^{一一七}つとて、^{一一八}は、^{一一九}かきとて、^{一二〇}い
 たりとて、^{一二一}なりとて、^{一二二}つとて、^{一二三}は、^{一二四}かきとて、^{一二五}い
 たりとて、^{一二六}なりとて、^{一二七}つとて、^{一二八}は、^{一二九}かきとて、^{一三〇}い
 たりとて、^{一三一}なりとて、^{一三二}つとて、^{一三三}は、^{一三四}かきとて、^{一三五}い
 たりとて、^{一三六}なりとて、^{一三七}つとて、^{一三八}は、^{一三九}かきとて、^{一四〇}い
 たりとて、^{一四一}なりとて、^{一四二}つとて、^{一四三}は、^{一四四}かきとて、^{一四五}い
 たりとて、^{一四六}なりとて、^{一四七}つとて、^{一四八}は、^{一四九}かきとて、^{一五〇}い
 たりとて、^{一五一}なりとて、^{一五二}つとて、^{一五三}は、^{一五四}かきとて、^{一五五}い
 たりとて、^{一五六}なりとて、^{一五七}つとて、^{一五八}は、^{一五九}かきとて、^{一六〇}い
 たりとて、^{一六一}なりとて、^{一六二}つとて、^{一六三}は、^{一六四}かきとて、^{一六五}い
 たりとて、^{一六六}なりとて、^{一六七}つとて、^{一六八}は、^{一六九}かきとて、^{一七〇}い
 たりとて、^{一七一}なりとて、^{一七二}つとて、^{一七三}は、^{一七四}かきとて、^{一七五}い
 たりとて、^{一七六}なりとて、^{一七七}つとて、^{一七八}は、^{一七九}かきとて、^{一八〇}い
 たりとて、^{一八一}なりとて、^{一八二}つとて、^{一八三}は、^{一八四}かきとて、^{一八五}い
 たりとて、^{一八六}なりとて、^{一八七}つとて、^{一八八}は、^{一八九}かきとて、^{一九〇}い
 たりとて、^{一九一}なりとて、^{一九二}つとて、^{一九三}は、^{一九四}かきとて、^{一九五}い
 たりとて、^{一九六}なりとて、^{一九七}つとて、^{一九八}は、^{一九九}かきとて、^{二〇〇}い
 たりとて、^{二〇一}なりとて、^{二〇二}つとて、^{二〇三}は、^{二〇四}かきとて、^{二〇五}い
 たりとて、^{二〇六}なりとて、^{二〇七}つとて、^{二〇八}は、^{二〇九}かきとて、^{二一〇}い
 たりとて、^{二一一}なりとて、^{二一二}つとて、^{二一三}は、^{二一四}かきとて、^{二一五}い
 たりとて、^{二一六}なりとて、^{二一七}つとて、^{二一八}は、^{二一九}かきとて、^{二二〇}い
 たりとて、^{二二一}なりとて、^{二二二}つとて、^{二二三}は、^{二二四}かきとて、^{二二五}い
 たりとて、^{二二六}なりとて、^{二二七}つとて、^{二二八}は、^{二二九}かきとて、^{二三〇}い
 たりとて、^{二三一}なりとて、^{二三二}つとて、^{二三三}は、^{二三四}かきとて、^{二三五}い
 たりとて、^{二三六}なりとて、^{二三七}つとて、^{二三八}は、^{二三九}かきとて、^{二四〇}い
 たりとて、^{二四一}なりとて、^{二四二}つとて、^{二四三}は、^{二四四}かきとて、^{二四五}い
 たりとて、^{二四六}なりとて、^{二四七}つとて、^{二四八}は、^{二四九}かきとて、^{二五〇}い
 たりとて、^{二五一}なりとて、^{二五二}つとて、^{二五三}は、^{二五四}かきとて、^{二五五}い
 たりとて、^{二五六}なりとて、^{二五七}つとて、^{二五八}は、^{二五九}かきとて、^{二六〇}い
 たりとて、^{二六一}なりとて、^{二六二}つとて、^{二六三}は、^{二六四}かきとて、^{二六五}い
 たりとて、^{二六六}なりとて、^{二六七}つとて、^{二六八}は、^{二六九}かきとて、^{二七〇}い
 たりとて、^{二七一}なりとて、^{二七二}つとて、^{二七三}は、^{二七四}かきとて、^{二七五}い
 たりとて、^{二七六}なりとて、^{二七七}つとて、^{二七八}は、^{二七九}かきとて、^{二八〇}い
 たりとて、^{二八一}なりとて、^{二八二}つとて、^{二八三}は、^{二八四}かきとて、^{二八五}い
 たりとて、^{二八六}なりとて、^{二八七}つとて、^{二八八}は、^{二八九}かきとて、^{二九〇}い
 たりとて、^{二九一}なりとて、^{二九二}つとて、^{二九三}は、^{二九四}かきとて、^{二九五}い
 たりとて、^{二九六}なりとて、^{二九七}つとて、^{二九八}は、^二

[illegible]

くふれりあひれりはたゞりて又た乃にぬ
こさるゝはまんらうしそいさそすり
しうれやうとらうすけぬかりひとん
けるるれ難はうとまんや

いふあひにちとふれはるのやうなこの目
のやうにちとふれはるのやうなこの目

[illegible][illegible]

元祿十四辛巳霜月武州麻布古書久旱後記

伊勢物語 双道院御講公松之



凡書と講とある先題とあるは述事

中京極黄門奥書ふくむは御奥書

伊勢物語根源古人不同或曰在原中將自

記、周茲強退此奥く詞等

いふれいふく又いふくいふくいふく

いふくいふくいふくいふくいふく

いふくいふくいふくいふくいふく

いふくいふくいふくいふくいふく

いふくいふくいふくいふくいふく

天長七年
三月
廿二日
書

五

伊勢物語抄

(伊勢物語惟清抄・異本)

列帖装二帖。縦一六〇厘、横一七〇厘の枳形本。薄茶色無地布表紙の中央に朱色地金泥下絵の題箋を貼り、「伊勢物語抄」と外題を記す。見返しは金地布目に花唐草。料紙は鳥の子で、墨付きは上帖六〇丁・遊紙二丁、下帖八六丁・遊紙はない。『伊勢物語惟清抄』は、三条西実隆が大永二年(一五二二)におこなった伊勢物語講釈を清原宣賢が筆録し、若干の補説を加えたもの。広く流布し、『伊勢物語闕疑抄』などの後世の注釈にも大きな影響を与えた。本書は、美しく装丁された江戸時代中期以降の写本。天文十六年(一五四七)の宣賢の奥書、大永二年の実隆の奥書、天文六年の公条の奥書を有するが、本来の『惟清抄』と比べると文章に異同が多く、やや末流の異本かと考えられる。同筆の古今和歌集(嘉禄本・冷泉為秀相伝本系統)とあわせて伝来する。(↓第十一集 二十七)

